

五十嵐梅夫・濱藻と俳諧一枚摺

塚 本 照 美

はじめに

五十嵐梅夫は武州大谷村（現、東京都町田市南大谷）の俳人である。名を五十嵐伝兵衛孝則、俳号を梅夫または桑園と称した。文政三年（一八二〇）六十三歳で逝去。梅夫の生まれ育った大谷村は、幕末に至るまで旗本久留忠兵衛正吉の知行村であった。五十嵐家はその旗本領の名主を代々勤め、近在に知られた素封家であった。梅夫の父は祇室と号する加舎白雄の門人で、梅夫も白雄門の一人であった。

娘濱藻は江戸後期における女流俳諧師。名は茂代。安永元年（一七七二）に武州大谷村で生まれ、弘化五年（一八四八）七十七歳で逝去した。濱藻も父梅夫の影響を受け、幼き頃から俳諧に親しんだ。濱藻の句の初出は寛政十一年（一七九九）成美編の『くらまもっこ』である。また、文化十年に刊行された七五三長齋編纂の『万家人名録』²には父は名のみで、娘濱藻は絵姿と讃句入りで掲載されている。梅夫・濱藻父娘は文化三年（一八〇六）から八年にかけて、西国行脚の旅に出た。肥前国長崎・豊前、筑後、筑前、備後・小豆島・

難波・京・伊勢・近江・尾張の各地を回り、旅先の各地で俳諧を通じてその地の人々と交流し、発句・連句作品を残した。それらに基き、梅夫は井上士朗の序を冠して『草神楽』を刊行し、娘濱藻も女性ばかりの俳諧連句集『八重山吹』⁴を、近江の志字の序を載いて刊行した。

梅夫・濱藻父娘は武州大谷村の俳人ではあったが、化政期において、一茶・成美・道彦ら、当代の代表的な俳諧師と交流していた。

一、歌舞伎顔見世番付を模した一枚摺

梅夫・濱藻の二人が多くの俳人と一緒に描かれている一枚の摺物がある。⁷

俳諧一枚摺について、雲英末雄氏は「多色摺の歴史と俳諧一枚摺をめぐる」の中で、「俳諧一枚摺が意図的に作成されるようになったのは、宝永五年以降で、（中略）鈴木春信が絵暦によって錦絵を創始した明和以後江戸でも多色摺の俳諧一枚摺が流行し始める。次いで、寛政初年から文化・文政期にかけて急速な流行を見るようになり（後略）。」と述べている。また、「摺物は、書肆が一般に



販売するようなことはほとんどなく、宗匠や同好の士が画家に頼み、あるいは自分で描き、それを彫師に彫らせ、摺師に摺らせて出来上がったものをお互いに交換し合って楽しんだものであり、極めて趣味的な色彩の強いものであったといえる」とも述べている。

梅夫・濱藻入集の一枚摺は、「甲子十月十日」の越後からの道彦の消息が記されている物や文化八年に尾張の土朗の古希を祝ったものであるう雲帯発行のものがあるが、歌舞伎顔見世番付を模した一枚摺はこのほかには確認できていない。

この一枚摺の大名題は「日本俳諧根元」。座本は「蕉翁座」。ワキの言葉は「正風一体」とあり、さらにその下に三行の割り書き「元禄年間より盛行／今文化七庚ノ午半迄

／凡百廿有余年相統」とある。四十人の俳人の真ん中には、喜年が「風流之巻」と書かれた掛物を持つている。

この一枚摺には「今文化七庚ノ午半」や「蕉風一鉢」の書入れがある。この摺物が、梅夫・濱藻父娘の西国への旅との関係を考察したい。

なおこの摺物には題名がないので、大名題の文字から便宜上「日本俳諧根源蕉翁座」として論を進めていくこととする。

二、「日本俳諧根元蕉翁座」の検証

大名題には「日本俳諧根元」とあり、「蕉風一鉢」の語を伴う。芭蕉の眠る粟津の義仲寺を中心として芭蕉讃仰熱が高まり、芭蕉忌日の十月十二日に催される追善の会が催されるようになった。その会が「時雨会」であり、霊前に捧げられた出座の面々による連句や発句、諸国俳人の寄進句を記録した物が『時雨会集』である。『時雨会集』は芭蕉没後七十年経った宝暦十三年（一七六三）に近江の浮巢庵文素によって初めて刊行され、宝暦以後毎年行われ、天保五年までの長期に及んでいる。

芭蕉没後の享保期に、俳諧の大衆化が進み、天明期（芭蕉没後七十年から百年の時期）には、蕪村を筆頭に枵良、暁台らが、俳諧の墮落を嘆き、芭蕉に帰れと活躍した。その後蝶夢が芭蕉七十回忌法要に粟津の義仲寺を訪れ、寛政四年（一七九三）に芭蕉百回忌を盛大に成し遂げた。この摺物において、芭蕉を顕彰する言葉が「日本俳諧根元」と「蕉風一鉢」「蕉翁座」である。

では、名題下の割書きは何を意味しているのか。「元禄年間より」

とは、元禄七年十月十二日、芭蕉が義仲寺に埋葬されてからの意を表す「元禄」であろう。つまり天明三年刊の『時雨会集』の序文には「元禄七年当寺に埋葬し奉りし頃」と記載されている。「文化七庚午半迄」はこの「日本俳諧根元蕉翁座」が摺られた時が文化七年（一八一〇）のことをあらわしているのであろう。つまり、「元禄年間より盛行／文化七庚午半迄／凡百廿有余年相続」とは元禄七年（一六九四）十月十二日に芭蕉が入滅して以来「凡百廿有余年相続」と、ずっと芭蕉翁顕彰の流れは続いていると、述べているのである。

この一枚摺で、梅夫は画面左端に描かれ、濱藻はほぼ真ん中の前面に位置している。濱藻の周りには、信州の柳莊、江州の野秀。信州の素槩、奥州の平角。巻物を手にしている外宮の鶴鳴、三井寺の千影など当時の重鎮が描かれている。

ではこの一枚摺には他にどのような俳人が描かれているのか。描かれている俳人を右端から順を追って検証する。なお検証するに当たり、当時の人物評価であり、現存人名録ともいべき『万家人名録』と『新板諸国はいかいし大角力ばん付』（文化八年）¹²の記載事項を基にした。

右端、最後列は季東である。『万家人名録』『新板諸国はいかいし大角力ばん付』共に記載はない。当時は伊勢四日市・伊勢神戸藩主本多候の賄御用で俳諧を士朗に学んだ俳人であった。その前には吾友が描かれている。『万家人名録』には「秋山氏。俗称八十八。住于肥前国長崎・号秋之庵」とある。『新板諸国はいかいし大角力ばん付』

には西の方前頭二十六枚目に記載があり肥前の国で力の有った俳人であることが分かる。その前は天津の烏頂である。『万家人名録』には「井口氏。号関井・通称井口市郎右衛門」の記載。『新板諸国はいかいし大角力ばん付』には東の方前頭六十二枚目に記載がある。逢坂関走井の名物餅屋で、俳諧は長夢門人。「時雨会」の常連であった。右端二段目は飛驒の儲史である。『万家人名録』には「坂田氏。俗称長三郎。飛驒州高山人」の記載があり、『新板諸国はいかいし大角力ばん付』には東の方前頭八枚目という高い位置に記録されている。右端の最前列は友鳳である。『万家人名録』『新板諸国はいかいし大角力ばん付』ともに記載がないが、『尾張俳人考』には「名古屋・湖月庵・前田」と記載がある。

右端より二列めは江州の垂溪である。『万家人名録』には「奥村氏。称俊治。近江国平松処士」とあり、当時は代官であった。『新板諸国はいかいし大角力ばん付』には記載はない。その垂溪の前には妻である志宇女が描かれている。この一枚摺には女性も濱藻と志宇だけである。志宇は『万家人名録』には「関氏。号美松。江州垂溪室志宇。子貞幹。又好和漢書。夕詞才能和歌」とある。『新板諸国はいかいし大角力ばん付』には記載がないが、『諸国正風俳諧士番付』には濱藻と志宇は東西は分けるが、同じ位の西の方前頭十二枚目に「江州志宇女」と記載がある。志宇と同じ段位には尾張の大商が描かれている。大商は『万家人名録』『新板諸国はいかいし大角力ばん付』共に記載はない。その前面には芳之がいる。『万家人名録』には「通称寺村与左衛門。近江国八幡人」とある。『新板諸国はいかいし大角力ばん付』には記載がないが、『諸国正風俳諧士番付』には西前頭

二十四枚目に記載されている。二列目の最前段は雨塘である。白雄の高弟で本業は廻船問屋。道彦没後江戸に出て、金令舎を継ぐ。晩年は如帛と改号した俳人である。『万家人名録』に「小河原氏。称七郎兵衛。下総州曾我野人」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉に記載はない。

三列目の最後段は大坂丹頂である。『万家人名録』に「澤田氏。号霍舍・俗称俵屋幸助。大阪堂島米賈」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉に東の方前頭六十三枚目に記載がある。丹頂の前は袈裟の衣を付け、奉書らしき物を手にして、大きく描かれている三井寺千影である。蝶夢門人であり、三井寺田満坊の寺侍として義仲寺の管理をしていたこともある。『万家人名録』には「三井寺 長等 山下。号敲月居」の記載がある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉に記載はない。丹頂の前には大津の申斎が続く。『万家人名録』には「福田氏。号清風庵。住于近江大津米屋町」五来とも号す。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には東の方、前頭五十七枚目に記載あり。信州の柳莊はその前にいる。柳莊は善光寺代官。『万家人名録』には「今井氏。号鷗翁。信州善光寺代官。文化八年辛未年没」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には東の方前頭十八枚目に、〈諸国正風俳諧士番付〉には板元としての記載があり、化政期信州を代表する俳人であった。三列目最前段は筆を手にした奥州の平角である。『万家人名録』には「氏平野。号株園。奥州南部盛岡処士」の記載。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉に東の方前頭六枚目という高い位置での記載である。

右端から四列目には江戸春蟻、野秀、濱藻が描かれている。春蟻

は江戸新河新堀の人で、武州八王子の出身。諸国に連絡網を持ち、情報通として知られた俳人である。『万家人名録』に「井上氏。名蟻庵。号臨界。称十次郎・好詩詞」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には西の方世話人という高い位置に掲載されている。野秀は尾張の俳人で、『八重山吹』の中で濱藻と両吟歌仙を巻いた素月の夫である。妻である素月は「加島九右衛門室。尾州城北安井村人」と『万家人名録』には記載されているが、野秀は『万家人名録』〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉共に記載はない。濱藻は『万家人名録』には「東都人 五十嵐梅夫女」の記載がある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には記載はないが、〈諸国正風俳諧士番付〉東の方前頭十三枚目という高い位置に「江戸浜も女」とある

中央は三人の俳人が大きく描かれ、後ろより衣冠束帯に仁王立ちし、巻物を手にしている外宮の鶴鳴。その前は信濃の素槩、それに越後の左琴である。鶴鳴は『万家人名録』には「松田氏。名幸慶。号西竹庵。称与吉。勢州山田祇官」とあり、〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には東の方前頭二十二枚目と記載がある。素槩は信州上諏訪の裕福な油問屋の主人で俳諧を土朗に学んだ。寛政から文政にかけて知名俳人の番付では常に上位に位置づけられていた。『万家人名録』には「信濃国上諏訪人。俗称島谷太郎右衛門」とある。中央最前列は頭陀袋を首から下げ、短冊を手にして大きく描かれている左琴である。左琴は上越高田の俳人で土朗門である。『万家人名録』には「室氏。俗称市右衛門。住于越后高田。文化十一年春卒」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には東の方前頭五十一枚目にある。

中央より左一列目は「風流の巻」という軸を手を持つ越後の喜年である。江口善平という士朗門人である。『万家人名録』に記載はない。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には東の方前頭二十六枚目の記載がある。その前は大阪の青梁である。『万家人名録』には記載はないが、〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には西の方前頭十六枚目に「サツマ青梁」と載っている。その一段目は梓姿の奥州の素郷である。奥州盛岡生まれで、上京して蘭更門に。奥羽四天王の一人。『万家人名録』には「氏小野。号松壽。俗称永二。奥州南部盛岡処士」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉に記載はない。

中央より左二列目は堂島米彦である。大坂堂島三丁目の人。長谷彦太郎。米屋の屋号から米彦とも白雀園とも号した。『万家人名録』に記載はないが、『万家人名録』の校正をしている俳人である。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉に西の方前頭九番目にある。二段目は丹波の武陵である。『万家人名録』には「号杜陰。丹州篠山城西大山人」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には記載なし。最前列は江戸国村である。巢兆の高弟で鶴声居とも号した。『万家人名録』には「江戸姓高橋。通称源蔵。江戸千住人」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には東の方前頭四十二枚目にあり。前には大きく描かれている名古屋沙汰がいる。名古屋本重町常瑞寺の住職で名は了榮。暁台門に入り、松叟または花癖祥汝と称した。士朗とは極めて親しく尾張五老の一人。『万家人名録』には「号花癖。住于尾州名古屋常瑞寺。」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉に記載はない。

中央より左三列目には宇洋、椎巳、春坡、蕉雨が並ぶ。大津の宇洋は『万家人名録』には「前田氏。俗称新六。居于江州大津湊町」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には西の方前頭七十六枚目の記載がある。松坂の椎巳は『万家人名録』には「姓倉田氏。号椎亭。通称孫右衛門。勢州津城西大塚人」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉は東の方前頭六十八枚目に記載がある。春坡は呉服商大丸四代目の当主。几重の門人。『万家人名録』は「下村氏。京師人。号遅日庵」の記載。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉に記載なし。信州飯田の蕉雨は士朗門人。富豪であつたが俳諧に入れあげ江戸へ移住した。『万家人名録』には「姓桜井。通称三郎左衛門。号八巢。信州飯田人」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には記載なし。

中央より左四列目には後ろより外宮省我、京布セツ、江戸梅夫が描かれている。外宮省我は『万家人名録』には「齋藤氏・上総国長柄郡人」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉記載なし。京布雪は『万家人名録』に記載無し。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には西の方前頭四十九番目に記載がある。梅夫は『万家人名録』には「五十嵐氏。俗称文六、東都人」の記載があり、〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には西の方前頭二十八枚目に記載がある。

一枚摺の左端の隅の列には後ろから尾張の大蘇、京の岱李、茂良、伊勢の孔阜、三輪の佳雄が描かれている。大蘇は士朗に師事。『万家人名録』には「俗称山城屋左兵衛・居于尾州名古屋大曾根竹屋町」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には記載はない。岱李は『万家人名録』には「姓八木氏。名盈寧。俗称卯兵衛。京寺町

通押小路下住」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には西の方前頭四十四枚目に記載がある。茂良は『万家人名録』には「住于洛北野紅梅殿傍満藏院、氏清瀬、名昌雄。号菴庵」記載があり、〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には東の方前頭四十九枚目の位置である。伊勢の孔阜は『万家人名録』には「俗称長井左兵衛。住于勢州神戸」とあるが、〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には記載はない。三輪の佳雄は『万家人名録』〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉共に記載無し。

以上、一枚摺「日本俳諧根源蕉翁座」に描かれている俳人を検証したが、八割近くの俳人が『万家人名録』に掲載されていることや、〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉にも載っている俳人が多い事であった。しかし、何の手がかりも見出せない俳人もいた。

三、「日本俳諧根源蕉翁座」と『草神楽』『八重山吹』

西国行脚にでた梅夫と濱藻の旅日記は見つからない。しかし五年間にも及ぶ行脚の足取りや様子は、二人が上梓した『草神楽』『八重山吹』の中から伺うことができる。

梅夫の『草神楽』は半紙本六冊、文化八年刊。井上士朗の序。興行場所や興行日の不明な歌仙も二十六巻ほどあるが、歌仙七十二、半歌仙三十五を天・禮・楽・射・御・発句集の六冊に収め、京烏丸の俳諧書肆勝田善助から版行した。

娘濱藻の『八重山吹』は女性ばかりの俳諧連句集で、半紙本二冊。序は美松の志字。歌仙十五、半歌仙三を天・地の二冊に収め、文化六年頃にやはり京の書肆勝田善助から上版している。この両書から

一枚摺に描かれている俳人を検証する。

文化三年梅夫・濱藻は江戸を発った。その時の様子は信濃の俳人雲帯宛ての書簡から伺うことができる。

尚／＼春ハ松のうちに木立いたし度候。光琳風画家大阪芳婦郷にて大かた大坂迄同道いたし候と奉存候。(中略) 上田へおどり四五番も残し置申したく候。敷原へ一二夜、夫より松本にすこし滞留いたし度候。松本ハ余り／＼応じ方滞と御座なく候間□広樹嶮被下たく候。大阪江戸堀五丁目近江屋新作かた迄、御文通被下候得バ相廻し申候。亦尾州士朗師迄。右両所之内へねがひ上候以上。

雲帯先生

松の内に江戸を発ちたいこと、大坂迄は帰郷する絵師の中村芳中と一緒であること。帰路は中山道経由で、上田の雲帯の所によること。さらに士朗に連絡を頼むことや旅先での文音取次所まで書かれている書簡である。

それから半年、『草神楽』での最初の興行地は安芸御手洗で、樗堂との三吟歌仙である。樗堂は『万家人名録』には「栗田氏。予州松山人。遊于芸御手洗」の記載があり、最終巻に跋を添えている。更に、〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉では、成美と並んで行司の位置にあり、当時の俳壇における重鎮であったことが分かる。

文化丙寅六月廿六日 安芸御手洗南湖山に二疊庵をあるじとして

松風の中を行也夏の月

波間藻

何もおもはず眠る青鷺

樗堂

客ぶりもあろじもかはる庵にて

梅夫

濱藻を主客として、樗堂、さら梅夫に堂々の付け句である。

樗堂宅から梅夫・濱藻は九州小倉へ渡り、九月十一日には長崎に着いた。長崎の久松菊也邸で催された歌仙が『草神楽』『天』に収録されている。「天」は文化三年九月から十一月まで肥前長崎での興行歌仙を記録している。特に、士朗の序文には「草かぐらはところ／＼に俳諧をたゝきありくの名なり、そのひゞき瓊の浦によく転びてをかしき音の出たればこれを一集のはじめとしてときこへけるあらおもしろの拍子やな　士朗」とあるように、長崎固有の地名を入れて書いている事であり、長崎への特別の思い入れがあった事が伺われる。

長崎では菊也宅に身を寄せた。菊也は当時町年寄りであり、江戸に出て道彦に学び、成美とも親交のあった俳人である。『新板諸国はいかいし大角力ばん付』には東の方前頭三十一枚目に在り、「万家人名録」には「久松氏。俗称熊十郎。号九月堂、又、執中井。住于肥前長崎西浜町」の記載がある。

『草神楽』の「天の部」では吾友との歌仙興行が記録されている。

「天」部の冒頭歌仙は文化三年（一八〇六）九月十四日の長崎執中亭興行のものである。文化丙寅（文化三年）年菊月十六日長崎松の森にて（十一吟）楚江・登竜・其映らと吾友同座の十一吟歌仙である。

文化丙寅（文化三年）年菊月十六日長崎松の森

白菊に塵履きよせん朝ぼらけ

楚江

提てはこぼす水の三日月

登竜

はら／＼と鳥立さはぐ露降て

其映

山の根岸に轆轤挽なり

盤露

春の日の暮さうにして小一時

爛友

すだれ外せば桃の花咲

友之

手をついて草の蛙の歌申

梅夫

奈良のみやこは微雨勝也

波間藻

甲斐なくも人の跡にはつかぬとて

祥禾

子になぶらる、洗ひ髪かな

吾友

四五枚の筵妬くも畳みけり

烏考

初折裏からは楚江・濱藻・祥禾・梅夫の五人で万尾。さらに、同十五日には、長崎平田氏興行と題して、濱藻・吾友・烏考・楚江・夫との五吟。

同十月一日には長崎秋山氏興行として、吾友・梅夫の両吟歌仙。同十月十二日は長崎於大同庵時雨会興行として、十四吟歌仙を巻いている。吾友との最終歌仙は同年十一月二十日の日見峠での其映と梅夫、濱藻との四吟歌仙である。この歌仙には、興行場所不明との記載があるが、次のような前書きがついている。

親子ふたりが草に身を置くものからたまのうら波にふき付けられしは丙寅九月十一日の事なり、かた／＼のちなみより雪霜の愁なくけふや霜月廿四鳥帰杖を吾友・其映の小野湖に送れて日見峠より見帰り／＼

秋冬のうつりかはりを三月越

梅夫

雪の小蓑にすがりては行

其映

色かへぬ松のあるじとはやされて

吾友

月より丸きものとはなし

波間藻

日見峠での別れの興行まで、吾友とは数多く歌仙を巻き、親交を深めたようである。長崎での七十日間の滞在期間で父娘が交流した俳人の顔ぶれは菊也・馬印・吾友・鳥考・吾友・楚江・登竜・其映・盤露・友之・蘇十・など二十一名であった。

十一月に長崎を発った梅夫らは、十二月には筑後・筑前と遊歴し、翌文化四年（一八〇七）には赤間が関を越え、備後・安芸・備中へと歩を進め、暮れの十二月には讃岐の松原で越年をしている。文化五年は讃岐の小豆島での歌仙興行。

文化六年四月には京へ上つてきていた。一枚摺りに描かれている布雪・岱李・茂良は『草神楽』『御』の部の第一巻で見ることができ

る。「御」は「射」に続く文化六年四月から十一月に巻かれた歌仙を中心に、文化四年に興行された四歌仙、文化七年に興行された二歌仙を加えた記録である。

文化六年四月京芭蕉堂での歌仙興行である。主は芭蕉堂の蒼虬。

京師東山於芭蕉堂

みじか夜とおもはるゝなり貴船川

蒼虬

夏山吹のほち／＼と咲

梅夫

一疋馬に二つの役もちて

何頼

柱のはたにたてる徳利

波間藻

雨の月馬に柞が散ば相ちる

千阿

いとゞは髭をこがされて飛ぶ

茂良

酒桶に階子をかけたる朝寒に

岱李

来ると惟然が毎日も来る

布雪

蘭更の没後、蒼虬は芭蕉堂主として京俳壇の地位を確固たるものとしていた。『万家人名録』には、「姓成田。号南無庵。加賀金沢人。住于洛東東山双林寺芭蕉堂。蘭更門人」とある。〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には西の大関として君臨している。その蒼虬がこの歌仙の催主で、脇を梅夫が付けている。表八句には布雪・岱李・茂良が名を連ねている。門人が十一人集つての興行であり、京に上り、芭蕉ゆかりの地での興行はいかに華やかであつたことが想像に難くない。

その後二人は、京を離れ、五月四日には大津で五来（申齋）と三吟歌仙。

さみだれのためでたさを見よ竹の朝

五来

撫子までが宿の草なり

波間藻

尻こはき馬追込を常にして

梅夫

濱藻らに会つた五来の嬉しさが伝わってくる歌仙である。

続いて五月十日には近江の平松美松亭で、濱藻は志宇との両吟歌仙を巻いている。

「八重山吹」「地」には次の歌仙がある。

文化己巳五月七日 近江平松美松亭興行 宇治乙方のわたりにて

柴舟は直なものなりほととぎす

波間藻

雪の夜明けの景色卯の花

志宇

黒茶碗それにも並ぶひさごにて

胡麻殻はたく秋は来にけり

藻

鳩ふきが声の先より二日月

ものいふやうに茫うなづく

宇

桜木の宮はあれかと立つくし

藻

身のひとつだをかくす薄雲

宇

ここで、濱藻は『八重山吹』の序文を志宇にお願いしたのである。『八重山吹』の序文には「はたして其道を能くするものは柔なりといえども必ず剛しとや、濱藻の乙女ぞ俳諧にしては群がるをのこの中をも出ぬけ、其名隠れなきに、はた絵をも能して春宵の遊びに触れ……」とあり、志宇は濱藻の多くの才能を賛美した。

『草神楽』『御』の部には、志宇の夫で平松の代官である奥村徳純こと亜溪と梅夫との両吟歌仙が記録されている。

鳴きさうな空より鳴やほと、ぎす

梅夫

古茶の花香も風情なす比

亜溪

葉ふたつの笛のこ、ろや様すらん

同

五本の傘を五人して持

夫

月のさす松の小枝を引留

同

のぼりたる初たる汐の浜萩

溪

ここからわずか二日後、五月十二日に父娘は伊勢大塚の椎亭に着座している。椎亭(俳号烏翠・朴所と四吟に興じているこの歌仙も『草神楽』『御』の部で見ることができる。

椎亭こと、烏翠は勢州津城西大塚人で、『万家人名録』〈新板諸国

はいかいし大角力ばん付〉にも記載がある。

文化己巳五月十二日 椎亭にて

夕暮はみな敷に入る田植哉

烏翠

水鳥を聞てとす油火

梅夫

硯にもなるべき石を恵むらん

朴所

柿をかたげつ庭めぐりしつ

濱藻

一方へ人のかたぶく宵月に

夫

ひしこの網にかゝる大鯛

翠

さらに烏翠と、翌日にも父娘は三吟を卷いている。

その後二人は伊勢を離れ、摂津、灘・明石を回って再び九月に伊勢に戻っている。

『草神楽』『御』には大磯を立ち、伊勢で濱藻らと出会った行脚俳人葛三を交えての歌仙がある。その歌仙に喜年が同座し、途中から省我が一座している。

文化己巳九月六日 伊勢ながみねにて

稲の香や四五日休む旅づかれ

葛三

松を見に行軒の宵月

椿堂

狩人の遠山がよひ給着て

梅夫

釣瓶の水を水にうち込む

喜年

ほろ／＼と降て過たる薄あられ

波間藻

枯行萩の夕暮れの声

暁浦

椿堂は『万家人名録』には「徳田氏。号東竹庵。俗称長兵衛、勢州山田人」とあり〈新板諸国はいかいし大角力ばん付〉には東の方前頭十七枚目に記載されている。

翌菊月七日 伊勢山田すき庵興行には京東山芭蕉堂で歌仙を巻いた茂良が京から参上して加わり、三十吟という大所帯で歌仙を巻いている。九月九日には「すすき庵」で不ト、葛三、梅夫・濱藻の四吟歌仙を、九月八日は「伊勢西行谷夜興」と題して椿堂・省我・茂良・らが一座しての十一吟半歌仙である。

月見とて旅にゐるさへいそがしき

椿堂

暗きところに蓑虫の声

葛三

秋の水鮎も鰯も淀むらん

翠川

木の葉集めて人帰るなり

省我

新しき板戸に雪の梅の花

仙風

夜明がらすの十ヲばかり鳴く

梅夫

舟長の日和もしらぬ舟にゐて

虚舟

水に戻りし酔の匂ひなき

茂良

たのみたる呉羽の神の影もがな

波間藻

平安時代末期の歌人の西行法師が一時住んだといわれ、その雰囲気がしのばれる場所での夜興はどんなにか心弾んだことだろう。

翌十日は「省我なる人を主として吟月亭」と題しての十一吟の半歌仙であり、伊勢では連日歌仙興行を行っていたことが記録されている。

野秀・大商・大蕨は、『草神楽』『禮』の部の興行年月日、場所未記載の土朗を取り巻く歌仙の中に名を連ねている。「禮」には冒頭に「天」と少しの異同ある土朗の序がある。「天」の序「草かくらはところ／＼に」の箇所が「桑園の草神楽は」と異同があり、土朗の

署名後の空白には「文化六といふ己巳とし葉月」の一行を加えている。「禮」の第一歌仙から第四歌仙までの土朗を取り巻く連中との歌仙と、「草神楽追加」という文字で区切られた難波・摂兵庫・伊賀

上野・河内等の歌仙が記録された構成となっている。

『草神楽』『禮』の第一歌仙は七吟で、岳略を首實として梅夫が脇を勤め、第三句を土朗、四句を濱藻が付けている。同座するのは、竹有・卓池・大阜といずれも尾張の俳壇の重鎮である。

梅盗む人は大かた月夜かな

岳略

松とるあとに向ふ高敷

梅夫

春風の尻吹おこす鴨啼て

土朗

壁もかはかぬ家に宿かる

濱藻

桶すえるほどは欠こむ山のはら

竹有

第二歌仙は梅夫が主客を、桂五が脇を、濱藻が三句、岳略が四句、土朗が五句を付けての五吟である。

第三歌仙は濱藻が主客、土朗が脇を付け、竹有が三句、梅夫が四句を付け、大商、松叟（沙汝）岳略・秋挙らによる十八吟である。

閑古鳥おぼつかなきをはじめ哉

波間藻

夏の海辺に草まくらして

土朗

月が出たら門た、き見ん八重葎

竹有

院の君に萩めさる日に

梅夫

第四歌仙には土朗が主客・脇を秋挙・三句を濱藻が付け、大商・野秀・大蕨らの十六吟である。

庵の蚤芙蓉の花にかくれけり

土朗

あつさうすらぐ有明の松

秋挙

八月になるより人は野に山に

波間藻

旅のけしきをおくるあき風

士朗

雨三粒いつの俣なる芒の穂

九岳

母よとなくか藪の小雀

梅夫

これら四つの歌仙は興行日未記入であるが、浜藻の『八重山吹』に、

文化己巳六月二日尾張野秀亭にて

関守の笑ふでもなし閑古鳥

素月

樗の花を蓑笠にして

波間藻

と、野秀の妻である素月との両吟歌仙の記録があり、夫である野秀がこの「禮」の第四歌仙に名を連ねていることや、梅夫が雲帯に宛てた書簡に、「二月月此節とも唯俳諧斗せり立いたし居此節の発句なし親子とも松翁と両吟、此度も三巻に及び申候」とあることなどから、文化己巳六月頃のことであろうと思われる。つまり、梅夫・浜藻父娘は、五月に伊勢を離れて、九月に伊勢に戻る間に尾張に滞在し、士朗を囲んで文化六年六月に歌仙興行を行ったのだらうと考えられる。

なお、この時、「難波の巻」（興行年月日未記載）には『万家人名録』編者の七五三長斎や瑞馬や魯陰らと二十九句の連歌俳諧の記録がある。

夏菊のさらりと咲て夜明けたり

瑞馬

桑の市たつ村の中道

梅夫

丸一里股引ほどく川越て

魯隱

用あるやうに鳩の鳴出す

濱藻

酔伏の月待筵かり寒け

長斎

瑞馬や魯陰は長斎の柿壺結社の仲間であり、三人とも『万家人名録』に記載がある。

米彦・青梁・丹頂は、『草神楽』「禮の部」の「追加」の難波の巻に記載されている。米彦が主客、脇を濱藻が付け、竹斎が三句、梅夫が四句を付け、百堂・青梁・丹頂が一座しての半歌仙である。

二三人小桜咲ぬ我守りぬ

米彦

家持そめし春の夕暮

波間藻

蛤の口もふたがず入る月に

竹斎

蟬草といふ草の芽に立

梅夫

亦青梁が主客、浜藻が脇、米彦が三句、梅夫が四句を付けての四吟歌仙も難波で巻いている。この日付であるが、長斎から雲帯に宛てた文化六年十二月十五日の書簡に「鳴立庵葛三子も先ごろ滞留二而折角御噂仕御床敷奉存候」とあり、葛三は大坂滞在中に青梁・百堂・米彦らと歌仙をまいていることから、梅夫父娘が彼らと会ったのはこの時と考えられる。

千影・鳥頂・宇洋の三人は『草神楽』「禮の部」の文化庚卯（七年）四月二十七日粟津義仲寺の夜興に名を連ねている。千影は三井寺円満坊の寺侍で「時雨会」の催主。鳥頂・宇洋も江州大津の人で「時雨会」の中心的連衆である。

「粟津義仲寺夜興」と題しての歌仙。主客は千影、脇を梅夫が付け、三句を宇洋、四句を濱藻、五句を仙風、六句を鳥頂が付けての六吟

半歌仙である。

此中に宿かし鳥や夕桜

露に葦の傘を敷もの

蛭が子の転がる春の嬉しくて

眉より薄き山の有る無し

鳥頂については雲帯に宛てた文化五年十二月十日推定の書簡¹⁴がある。

千影

梅夫

宇洋

波間藻

梅夫・はま藻これはみな月の末に野子へたちよりなに花のかたへすぐにくだり候。此セツは四国を放れ九州にくだりおるとの事に御座候。追く西国行脚のものの登壇致候

梅夫・濱藻が九州行脚に赴いた時期は文化三年七月頃で、文化五年十二月推定というのは時期が旅程とずれている感があるが、書簡の文面からして文化三年の六月ごろに九州に下る前に大津に立ち寄り、鳥頂に会ったのだらうと予測できる。いずれにしろ以前から鳥頂、雲帯、梅夫・濱藻らは文音を通して交流があったとみることができよう。

一枚摺「日本俳諧根源蕉翁座」に描かれた俳人四十名（梅夫・濱藻含む）と『草神楽』『八重山吹』に録されている俳人との関係を検証した。

その結果、梅夫・濱藻の西国行脚の経路上の俳人は、季東・吾友・鳥頂・友鳳・亜溪・しう女・大商・芳之・丹頂・千影・申齋・野秀・鶴鳴・青梁・米彦・武陵・宇洋・稚巳・沙汝・春坡・布セツ・大蘇・省我・岱李・茂良・孔阜・佳雄と、三十八名中の二十七名の俳人で

ある。そのうち、旅路の興行で付け合いをした俳人は、吾友・鳥頂、しう女・亜溪・大商・丹頂・千影・申齋・野秀・青梁・米彦・宇洋・稚巳・沙汝布セツ・省我・岱李・茂良の十八人である。残りの九人の内、季東・友鳳・鶴鳴・武陵・春坡・大蘇の六人は『草神楽』『発句部』に句を寄せている。

特に武陵については、文化八年（一八一）二月二十日付けの申斎から武陵に当てた書簡¹⁵、

（前略）此のせつ梅夫・はまもとと天橋見ニ貴地へ廻り申候筈也。先日廻書したためさし出し候。出杖申候ハ、よろしく御伝声可被下候。（後略）

から、一座を組んで付け合いはしなかったものの、梅夫の帰路の事などを事前に連絡していることから、申斎も武陵も以前から梅夫のことを知っていた仲であろう。

残りの芳之・孔阜の二名は『万家人名録』に載っている人物であり、手掛かりのないのは佳雄一人である。

梅夫・濱藻の旅路から外れている俳人は十一人。飛驒の儲史。奥州の平角・素郷。信州の柳莊・素槃・蕉雨。江戸の春蟻・国村・雨塘。越後の左琴・喜年である。このうち、越後の喜年は葛三のように行脚しながら伊勢に赴いたのか未確認であるが、文化己巳九月六日伊勢長峰での十一吟歌仙に同座している。残りの十人の内、儲史・平角・柳莊・素槃・蕉雨・春蟻の六人は『草神楽』『発句部』に句を寄せている俳人である。残りの四人は『万家人名録』に記載されている俳人である。

一枚摺「日本俳諧根源蕉翁座」に描かれている俳人は、十九人が梅夫・濱藻の西国への行脚の中で付け合をした俳人であり、十二人の俳人が『草神楽』『発句部』へ入集した俳人である。つまり、全体の八割の俳人が『草神楽』『八重山吹』と関係している俳人であることだ。また江戸の雨塘や越後の左琴、奥州盛岡の素郷、伊勢の孔阜、江戸国村ら十人のように『万家人名録』と重複して掲載されている俳人が多く、一枚摺「日本俳諧根源蕉翁座」に描かれている俳人の八割がそれに当る。この点からは編者である長斎の関与が想定できそうであるが確認はできていない。

一枚摺「日本俳諧根源蕉翁座」に描かれている俳人の中で唯一接点が見出せないのは佳雄である。しかし三輪の佳雄について考えられることは『草神楽』『禮の部』には、興行年月日未記載の「河内の巻」や「伊賀上野の巻」等があり、そこに連中として同座した耒耜や若翁等に今回の一枚摺の情報を得たのかもしれない。

四、一枚摺「日本俳諧根源蕉翁座」と『時雨会集』との関係

「日本俳諧根源蕉翁座」の一枚摺は、梅夫・濱藻の西国行脚とは無関係でないことが検証できた。

西国行脚での梅夫・濱藻父娘の興行回数には百二十七回で、興行に加わった俳人は延べ六百余人にも達した。その中で一枚摺に描かれた俳人とはどのような繋がりがあったのだろうか。それを考察するために、蕉風を顕彰する『時雨会集』との関係を検証する。

「時雨会」とは、芭蕉の墓のある粟津の義仲寺で、芭蕉の命日（元禄七年十月十二日（一六九四））の十月十二日に行われる芭蕉顕彰の

供養の会である。その時刊行される撰集が『時雨会集』である。撰集構成は連句興業と奉納発句であり、地方の蕉門の常連が下支えをした。入集地域も全国的であり、天保五年まで長期に及んでいる。

「日本俳諧根源蕉翁座」に描かれている俳人は『時雨会集』に入集している俳人が多く、刊行されてから文化七年までの間に句を奉納している人が八割にも上っている。特に多いのは千影（天津）、烏頂（天津）、亜溪（近江）、申斎（近江）、宇洋（天津）、しう（近江）で素郷（南洲）、蕉雨（信州）、春坡（京）などであり、義仲寺ゆかりの地の俳人であることがわかる。

反対に『時雨会』への入集のない俳人は李東（伊勢）、雨塘（江戸）、喜年（越後）、青梁（大阪）は・沙汝（尾張）、孔阜（勢州）、佳雄（三輪）の八人である。

濱藻は文化六年の西国行脚中の一回だけ『時雨会集』に発句を奉納している。しかも濱藻は梅夫、成美らと共に、「遅参」という括りの中である。

梅夫は安永九年・天明元年・文化六年・文政三年と安永年間から数年投句している。ちなみに長斎は寛政十一年・文化七年・文政三年・文政五年とやはり数年にわたって投句をしている。一茶は西国行脚が最初であり、寛政七年・寛政八年・寛政九年・寛政十一年・寛政十二年・文政五年と寛政期が多い。成美は安永二年・安永五年・天明三年・天明七年・寛政八年・寛政十年・文化六年・文化十年・文化十一年と安永の頃から文化十一年の成美が身罷る年までの投句であり、深く芭蕉に傾倒していたことがわかる。

濱藻が『時雨会集』に奉納した文化六年には吾友・鳥頂・儲史・亜溪・志宇・大商・芳之・千影・申斎・濱藻・野秀・春蟻・宇洋・春坡・梅夫・布雪・蕉雨・大蘇と約半分の十八名の俳人の名がある。一枚摺に記載されていた「文化七年」の『時雨会集』には鳥頂・亜溪・志宇・芳之・宇洋・千影・布雪・茂良の八人の名がある。これらの俳人と梅夫・濱藻父娘の西国行脚の中での興行関係をみると、吾友・鳥頂・亜溪・志宇・大商・千影・申斎・野秀・宇洋・布雪の十二人が一座の連衆として同座していることであり、残りの儲史・春蟻・春坡・蕉雨・大蘇は「発句部」に句を寄せていることである。

以上から一枚摺に描かれている俳人は、芭蕉敬慕の念を持った俳人であり、梅夫・濱藻との興行の中から話が生まれ、梅夫・濱藻が義仲寺を訪れた時に一枚摺は作られていったのだと考えられる。

おわりに

一枚摺「日本俳諧根元蕉翁座」は記されている「今文化七庚ノ午半」や「蕉風一鉢」の文言等から梅夫・濱藻の西国への旅と関係していると考え、『草神楽』『八重山吹』を通して検証・考察した。

描かれている俳人の五割にあたる人が梅夫・濱藻らと一座を組んで俳諧を楽しんだ仲間であり、残りの内の三割の俳人が『草神楽』の「発句部」に句を寄せていた俳人であったことが検証された。このことから、「日本俳諧根元蕉翁座」の一枚摺は梅夫・濱藻父娘の西国行脚と関係していると考えられる。また芭蕉顕彰への意識の高い俳人の中で出来上がった一枚摺でもあった。

梅夫・濱藻らは西国行脚の中で、俳諧の中心地・義仲寺を訪れた。義仲寺は芭蕉ゆかりの寺。そこへの道中で付け合いを通して数多くの俳人と交流を温めた。梅夫・濱藻を含む彼らが趣向を凝らし、この「日本俳諧根元蕉翁座」の一枚摺が成立したのだと考えられる。

【注】

(1)「くらまもつこ」…寛政十一年成美編。「秋風や手習いの墨とくかはく 江戸少女はまも」と入集。

(2)『万家人名録』…大坂の七五三長斎が編纂し、米彦が校正を加え、文化十年（一八一三）に書肆勝田善助から刊行された。

『万家人名録』には、濱藻は肖像画付きで、「つゆよりもさきにのほるやけふの月」の讀句と「東都五十嵐梅夫女」の書入れが左隅に囲みで入っている。梅夫は一丁の中に三十数人の俳人と一緒にあり「梅夫 五十嵐文六、東都人」のみの記載。なお『万家人名録』に入集している俳人名の検索には、『万家人名録人名索引』（『近世文学論輯』森川昭編者 有限会社和泉書院発行 一九九三年）を利用した。

(3)西国行脚の中で、梅夫・濱藻は儒者である武元北林に出会った。日付は不明であるが、『北林遺稿 上』に漢詩二編が残されている。

贈梅夫

千里勝遊佳句多／吟成每付雪見歌／相逢相別忽忽裏／山雨江雲奈恨何
贈波間藻 梅夫女善俳諧 將赴小豆洲

瑜伽山上偶仙娥／聞得樽前白雲歌／所恨人間難久接／滄洲一去阻烟波
また、菅茶山とも出会った。文化五年（一八〇六）七月十一日「菅家往問記」「丁卯七月十一日 江戸大伝馬町三丁目新道／桑園梅夫／波間藻

／五十嵐文六』『黄葉夕陽村舎詩後編』には漢詩が残されている。

女俳諧師濱藻索詩 菅茶山

弓鞋不畏道程長／酔月吟花向遠方／形管到頭裁綿綉／何如歸作嫁衣裳
〔4〕『草神楽』『八重山吹』は富山県立図書館本を底本とした。

『草神楽』の序文は尾張の井上士朗である。

草かぐらはところ／＼にはいかいをたゝきありくの名なりけり。そのひゞき瓊の浦によく転びて、をかしき音の出たれば、これを一集のはじめとしてときこへける。あらおもしろの拍子やな

士朗

『八重山吹』の序文は志宇である。

はたして其道を能くするものは柔なりといへども剛しとや、濱藻の乙女ぞはいかにしてはむらがるをこの中をも出ぬけ、其名隠れなきにはた絵をも能して春宵の遊びにふれ鶴ふたつをつくり出すにひとつは雄にしていきほひ勇にたかく、ひとつは雌にして形みじうなごやかに書とりければ、いけるもかくやともてはやすに、打す、むねよとの鐘にや、こもれば程なく明る榎の戸を押開より夢ものの語を始めけり、描写しける鶴のふと動き出、羽づかひ頭もたげなどして、雲井にむかふけしきたつこはいかにせんといひあつかい、とかくするうちをのがれ背にすへ西の方へ行に（中略）日のもつとに女どちの附句と、のふとは此乙女ぞ、女ぶりのはじめならましとく集にものせよとて、其名を八重山吹とつけたまふ。心ばへのはかりしられぬは一勾井に、旅寝せし一夜の夢の面影といふはし書をせよとの心にまかせて、そゝる事面ぬるものなり。うつくし奈の志宇

志宇とは旅の後も文通があり、その書簡は現在「町田市立自由民権資料館」に収蔵されている。

〔5〕成美・寛延二年（一七四九）一月生。江戸浅草蔵前の札差。夏目氏。新板諸国はいかいし大角力ばん付（文化八年）諸国正風俳諧士番付ともに行

司。『万家人名録』には「姓夏目。号随齋。又日贊亭。東都人住于多田森。」梅友・濱藻も成美との交流が頻繁にあった。成美との書簡一通は現在町田市立自由民権資料館に収蔵されている。

〔6〕道彦・新板諸国はいかいし大角力ばん付（文化八年）では東の関脇。諸国正風俳諧士番付では東の方大関。『万家人名録』には「村上氏。陸奥人。号金令舍。来住于東都本白銀町。道彦との書簡は現在町田市立自由民権資料館に数多く収蔵されている。

〔7〕『日本書肆学大系68俳人の手紙』の後扉の参考資料。雲英末雄氏蔵から掲載。

〔8〕寛政期の俳諧一枚摺「雲帯を中心に」『江戸文学第二五号』雲英末雄監修。二〇〇二年 ぺりかん社発行

〔9〕道彦の「甲子十月十日」の一枚摺

さはつても荏殻の匂ふ夜寒かな

みち彦

秋日和芒のちるをよそに見る

素池

笠のうちに日の入にけり九月尽

梅夫

十時庵時雨会の最中に主が越より申しおこしたるは句のはじに冬柱庵が（素也）が三国峠の雪の中へさかさまに落馬して女郎花の歌も詠ぬありさま大笑なりしとの事を南岳がおかしがり其梯を戯画たるを始として各其日のほくを書きつけ前書きに続いて濱藻、柳莊等の発句が摺られている。

『日本書誌学大系71続俳人の手紙 附一枚刷』

矢羽勝幸編 青裳堂書店 平成七年刊

〔10〕雲帯発行の文化八年士朗の古希を祝った一枚摺。

霞より出てかすみを行日かな

素從

松毎に名を付て見んゆふ霞

如測

ことたりしものに日のさす嶺かな

素白

正月を誰とかたるぞ梅の花 是まも
春雨や京の駕舁皆若き 梅夫

古希祝

年つむやとしく／＼に年のうつくしき 士朗

『日本書誌学大系 66 俳諧摺物図譜』後藤憲二編集 青裳堂書店 平成四年刊

成沢雲帯は信州上田原町の人。七郎左衛門。上田嶋などの太物商。町役も務めた。加舎白雄は師であるが、自由に句作し、成美らとも交流した。遊俳。

(11)『時雨会集』…芭蕉の命日である十月十二日二義仲寺で行われる供養「時雨会」であり、その時連句興行。奉納発句を選集された追善の俳書が『時雨会集』である。『時雨会集』は宝暦十三年（天保五年）までの七十一年間発行された。諸国からの奉納句があり、書中「四来奉納」の標題で一括される一群の発句があるのが特色である。

『時雨会集』への入集の検索には『時雨会集成』（大内初夫監修。義仲寺発行 平成五年十一月刊行）を利用した。

(12) 新板諸国はいかいし大角力ばん付（文化八年）…世話人は境の喜斎・大津の五来・安芸の凡十・大坂の銀獅・大坂の百堂・長斎・兵庫の一章・灘の土川・飛騨の一左・加賀の車大・大坂の転城・江戸の春蟻である。最上段にランクされている十名は、乙二・道彦・素居・素樂・嵐外・葛三・午心・平角・眉山・巢兆・蒼虬・升六・木海・篤老・満和・幸雄（梅室）・瓢風・対竹（鳳朗）・祥禾・竹斎である。

『日本書誌学体系 68 俳人の手紙』後藤憲二編 青裳堂書店の後扉の参考資料。

(13) 諸国正風俳諧士番付…この番付には刊行年の記載がない。このことにつ

いて矢羽勝幸氏は、『俳人番付から見た二茶』（二茶の総合研究）矢羽勝幸編集・昭和六十二年十一月信濃毎日新聞社発行）の中で、「文化期の江戸俳壇を賑わしていた『道彦』『乙二』『二茶』などの名が上段に登場するところから、間違いない文化期のもので、さらに文化期なら当然登場してよい大阪の伴大江丸（文化二年没）や下村春坡（文化七年没）の名がなく、文化八年に亡くなった柳莊や同九年にこの世を去った成美の名があることから、文化八年（一八一）に刊行されたものだろうと、推測される。」と論じている。行司は成美、士朗、かとり、岳格、喜齋、閑叟。なおこの番付表には濱藻らが西国行脚の中で立ち寄った地域の俳人との重複が多く、「諸国正風俳諧士番付」掲載の俳人百二十六人のうち、四割強にあたる五十八人の俳人が『草神楽』『八重山吹』の興行に名を連ねている。

(14) 『日本書誌学体系 74 書簡による近世後期の俳諧の研究——俳人の手紙』正統編注解 矢羽勝幸著 青裳堂書店…平成九年刊。

(15) 『武陵来簡集』…大谷篤蔵編。西尾精一発行 昭和五十一年十二月発行（つかもと てるみ 本学大学院博士課程後期）